カフカの書くことにおける音楽

― 3つの動物物語を手がかりに ―

江　口　陽　子

フランツ・カフカの作品における音楽のモティーフが，彼の書くこととどう関連するのかを，『歌手ヨゼフィーネ，あるいは鼠族』，『変身』，『ある犬の研究』という3つの動物物語を手掛かりに考える。ここに登場する音楽は西欧的な音楽芸術の伝統にはそぐわない。ヨゼフィーネの歌は，歌というよりむしろ，鼠族の言語であり習慣でもある鼠鳴き(Pfeifen)である。彼女の鼠鳴きは，鼠族の生活の言葉にしえないものの表現であり，集団の一体化と温もり，そして静寂への渇望の表現である。『変身』の主人公グレゴールは，妹の弾くヴァイオリンの音に「待ち焦がれていた未知の食物への道」を見出す。妹の拙い音楽は，彼にとって妹との絆を保証するものへの，そして自らの命を繋ぐ糧への願望を担っている。『ある犬の研究』における音楽は，主人公の犬にとって，希求の対象であり，かつ物理的・力学的な力であり，また言語の領域には移せない伝え得ない体験である。

カフカは，何度も「非音楽的」な音楽に言及している。それは，言語や音楽の記号システムでは掬い取れない内的律動である。彼にとって書くことは，この本来記号秩序の網では捉えられないものに向かって，絶えず網を投げかけようとする逆説的な行為である。言葉にしがたいものと，同時にそれへの渇望を表わす音楽は，彼においてはしばしば動物形象と結合する。動物は，指摘されているように言語の記号秩序からの逃走の表現であろう。しかしカフカ特有の音楽との関係を考慮すると，動物形象には別の側面もみえてくる。

カフカには，言語の指示性から逃れ，そこで戯れようとする傾向がある一方，声としての言葉やテクスト以前のものへの回帰の願望も強く見られる。動物形象は，この言葉にならない声が発せられる口という領域の両義性を強調する。口は，発話と自己保存のための食行為とが共に属する場であり，動物の口は，この機能の本来の両義性を保持している。また，カフカは自分の書く行為を，しばしば「食べること」に喩える。現実生活では，書くことは食欲旺盛な父が代表する掟の領域への抵抗として，「食べないこと」つまり，断食・菜食主義の傾向と結合する。さらに，書く行為は，父の前で抑圧された発話への衝動の補償とも考えられる。彼の書くことは，「食」と「発話」の両義性が発揮される動物の口という象徴的な場において，自己実現を図る根拠をもっている。カフカ作品に現われる歌にならない声・非音楽的な音楽は，本来動物の口に属するものと思われる。それは動物の口を介し，カフカの自己保存の手段でもある書くことにまとわりつく欲求と憧憬を保証する。歌うヨゼフィーネの口，「動物の声」を発するグレゴールの口，音楽と食物の真理を同時に手に入れようとする犬の口は，カフカにとって，分節化されえない音楽としての言葉，つまりは声が宿る場所であり，自らの食欲を父の権威とは関係なしに肯定する根拠，さらには，彼の書く行為と死んだ言葉である文字を無効にしうる希望の記号である。